

パラシュート

1. ベッコウハゴロモとアミガサハゴロモの幼虫(No.29 ハゴロモ 参照)

6月、低木の枝が勢いよく伸び始めると先端に近い部分に白い棉のものが目につき始めます。その棉の中にアオバハゴロモの幼虫が隠れていますが、白い毛の束を背負っているベッコウハゴロモとアミガサハゴロモの幼虫も同じ場所にいます。幼虫、成虫共にハゴロモは、セミのように樹液を吸う昆虫です。

7月になると幼虫も大きくなり、背負っている白い毛がよくわかるようになります。この毛は分泌した蠟で簡単に折れますが、また分泌します。腹端の2節にある突起に根元を束ねて付き、右の写真のように後の1節は後ろ向きに、前の節は2つの突起に斜め側前方に毛が向けられるようになっています。毛の向きを変えることもできます。



毛をたたんだ時

成虫になると翅もできるのですが、ハゴロモの移動はジャンプが主です。驚くと3m以上も跳びます。手の上に乗せると、ポンと手応えを感じるくらいの力でジャンプします。跳び上がる時は毛を後方にたたんでいますが、降りる時は全体を傘のように広げて衝撃なく葉などに着地します。動物や植物が作る蠟は、炭素と水素に少しの酸素からなる物質、いわゆる炭水化物でできています。重い酸素が少ないため軽い物質であり、粘りの強度もあってパラシュートに適した材料なのでしょう。



毛を広げた時

上：側面 下：背面

2. ツクバネウツギの萼^{がく}

5月上旬には右の写真のような花が咲く低木です。打吹山南面や長谷の八十八ヶ所のやや乾燥し、日当たりの良いところに生育する木です。花卉の入り口下側にある黄色の模様は蜜の存在を示す蜜標(ガイドマーク)です(No.76 隠す 参照)。

名称は「突羽根」と「空木」の組み合わせですが、「突羽根」は萼が羽根突きを連想させたものです。11月には羽根の下側についた種子が枝先から離れ、おもりとなってクルクル舞いながら落下します。風が吹けば遠くまで種子が散布できるというしくみです。



ツクバネウツギの花



左：ツクバネ種子

右：ツクバネウツギ種子

羽根突きを連想させる種にはツクバネの名称がつけられます。4枚羽根の種子がつく半寄生低木の「ツクバネ」は単独の名称ですが、他種はツクバネガシといったように後に名が続きます。溪谷にあるツクバネガシは、枝先の葉の集合を羽根に見立てたことが由来です。また、日当たりの良いところに生育するコツクバネウツギの萼は、羽根が2枚で突羽根には見えませんが、ツクバネウツギに似ているところからの命名です。

ウツギは「空木」の意味で、茎の中が空洞のウツギ(卯の花で有名)に茎葉が似ているところからきていますが、ツクバネウツギの茎は詰まっています。命名の難しいところで、実態をよく表しているものがあるかと思えばさにあらず、あるいは意味がわからないものもありの世界です。

(倉吉博物館専門委員 國本洗紀 2023)